

『ウィーヌ氏』における〈転回点〉の欠如

野村, 知佐子
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9943>

出版情報 : Stella. 12, pp.15-31, 1993-03-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

『ウィーヌ氏』おける〈転回点〉の欠如¹⁾

野 村 知 佐 子

ベルナノスは1943年に出版された最後の小説『ウィーヌ氏』に9年の歳月を費やした。しかしながらその作品は、彼自身「私のいままでの作品のなかで最良の、最も完璧な作品」²⁾と強い自信をいだいていたにもかかわらず、最初不評であった。そんななかで1946年にクロード＝エドモンド・マニーによって書かれた書評はベルナノスを非常に喜ばせた³⁾。マニーによれば、ベルナノスは彼の作品中もっとも悪魔的な人物であるウィーヌ氏と、その存在によって崩壊を余儀なくされた教区フヌイーユを描くことによって、逆説的に神の存在を浮かび上がらせようとしたのである。本稿ではベルナノスの他の作品と比較したときの大きな違いである『ウィーヌ氏』における転回点の欠如について指摘したい。そしてその欠如の現れである〈欲望への偏愛〉と〈秘密の無効化〉という現象が、フヌイーユの村とウィーヌ氏の内部でどのようにおこなっているかについて考察する。

I 転回点の欠如とはなにか

ベルナノスは、彼の作品が激烈すぎるという非難を前にして、温和で偽善的なキリスト教社会を批判し、「十字架の血は彼らをこわがらせます。彼らを救うためなら血の一滴でことたりるでしょうが、わたし自身を救うためにはその血にすっかりつからなくてはならないのです」⁴⁾と述べている。この言葉に呼応するように『ウィーヌ氏』のなかに次のような一節が見うけられる——「多くの哀れな人たちにとって、優しさとは欠如にすぎない。ずるさや悪意の欠如という消極的な美德、純粹な抽象作用でしかない」[1351]。多くの自称キリスト者が善良と呼ばれるのがこの弱さのためなら、彼らの善良さとは、単に罪を犯すだけのエネルギーに恵まれていないだけのことであるといえよう。この消極的な善人はけっして神を見いだすことはない。黙示録に「汝は冷ややかにも

あらず熱きにもあらず、われはむしろ汝が冷ややかならんか、熱からんかを願う。かく熱きにもあらず、冷ややかにもあらず、ただ微温きがゆえに、われ汝をわが口より吐きださん⁵⁾とあるように、神のまなざしが向けられるのは世俗的な善良さとはほど遠い人々にたいしてなのである。フヌイーユの司祭は「冒瀆とはともかく靈魂を戦いに巻き込みます」[1509]というが、反逆するエネルギーをもつ者は、そのエネルギーのゆえに神と対峙することも可能なのである。このように凶暴な悪をおこなえない人間には偉大な善をなす力もないということができよう。

それでは過剰な生命エネルギーに恵まれたものはすべて神を見いだすことができるのか。結論から言えば、それは否である。罪の源である絶望が、不安と同様に個人の内部に生まれそこで大きくなるという属性をもつことから、それは生命エネルギーの一形態であるということができよう。キルケゴールにとってそれは二義性をもつものであった。すなわち絶望の深さとは同時に精神の深さであると⁶⁾。しかし、絶望や悪が肯定的に解釈されるとき、それはあらかじめ乗り越えられるべきものとして想定されていることを見落としてはならない。フレデリック・ルフェーブルのインタビューで述べているように、ベルナノスは少年期にバルザックを愛読した⁷⁾。モーリス・ブランショは人間喜劇を評して、登場人物たちの情熱がある一点に達するとき、それは彼らを全く別の生へと送りかえすという。このとき彼らはそれまで生きてきた生とは質的に全く異なる生を生きることになるのである⁸⁾。『田舎司祭の日記』の反逆的な少女シャンタルは司祭に向かって、もしも悪の探求が自分を失望させたなら、自分は必ずや悪にたいして復讐するという。これにたいして司祭は、そのときこそ彼女は神を見いだすだろうと答えるのである⁹⁾。つまりそこに達するとき、悪の探求は神との対峙に変貌するような一点が存在するのである。この点を転回点と呼びたい。『ウィーヌ氏』の特徴とは、生を一変させるこの点が存在しないことである。先行作品と比較したとき、この欠如は二つの形態をとって現れる。ひとつは〈欲望への偏愛〉である。

『悪魔の陽の下に』の女主人公ムーシェットは、キリスト教的立場からすればもっとも許しがたい罪である自死を選ぶにもかかわらず、最後に神を見いだす¹⁰⁾。これは自殺という行為が転回点を見いだすための一過程だったからである。転回点にたどり着くときすべての罪は浄化されるといえよう。しかしまた、この一点を見つけだすことだけが必ずしも重要なのではない。転回点を見いだせぬままに自死を選んだ人物として『新ムーシェット物語』のムーシェット

トをあげることができる。だがそこには彼女の、転回点を目指すひたぶるな歩みがあり、この作品を絶望から救っている¹¹⁾。以上のように転回点の存在とは、それに達したというじじつによってのみ表現されるのではなく、その一点が目指されたということによっても表されるのである。悪の探求や絶望の深さがこの転回点を目指さなければ、絶望は絶望でしかないし、悪もまた悪でしかありえない。したがって転回点の欠如の一形態とは、転回点を求めることを意識的に拒むことに他ならない。つまり、転回点を求めるためのエネルギーは、個々人の欲望を充足させるために消費されるのである。

転回点の欠如のもうひとつの形態とは〈秘密の無効化〉である。『悪魔の陽の下に』のドニサン神父は、告解室でことされる前に神に向かって愛の非難を投げかける。そのなかで彼は「どれほどいやしい人間にも秘密があります。それは人を清める有効な苦しみとしての秘密です」と述べる¹²⁾。この言葉に現れているように、秘密とは人を苦しめるものであり、この苦しみによって登場人物たちは転回点を見いだすのだといえよう。ムーシェットは子供の頃からもちつづけた不安のために殺人を犯した。また、『田舎司祭の日記』の伯爵夫人は息子を失った悲しみによって密かに神を呪いつづけていた。そして前者はドニサン神父、後者はアンブリクールの司祭という理解者によって、解放を得るのである。またベガンは『新ムーシェット物語』のムーシェットが、自殺を選ぶにもかかわらず救われたような印象を受ける理由のひとつとして、彼女が死の直前に人々の手について考えることをあげている。これは、孤立のなかにいるようでありながら、彼女がけっして他者の存在を忘れていないことを意味する、と¹³⁾。以上のように、秘密には浄化作用があり、それが作用するためには他者の存在という触媒が必要であることがわかる。したがって〈秘密の無効化〉とは、秘密そのものの解体、あるいは他者という触媒の不在であるといえよう。それでは転回点の欠如である〈欲望への偏愛〉と〈秘密の無効化〉は、『ウィーヌ氏』のなかでどのように描かれているか。

II フヌイーユの村における転回点の欠如

1. 欲望への偏愛

ネレイス夫人は、アンテルムと結婚した当初は美しく、紳士たちは彼女の周りに群がって彼の幸福をうらやんだ。多くの人々から愛される女性だった彼女は、ウィーヌ氏が現れた後、ちぐはぐな衣装に身を包んで馬車で村を駆けめぐ

り、村人たちの憎悪的となる。次の引用はネレイス夫人の言葉である。

「ごらんなさい、わたしは古びたおかしなぼろぎれに身を包んでいるでしょう、身なりなんてちっともかまわないのよ。わたしの楽しみは自分の体を辱めること、そうすればいっそうこの体はわたしのために役立つの。欲望が、嫌悪感を克服することもせず、あえて無理をしたりせず、後悔と恥ずかしさを足がかりにしないのなら、そんなものが欲望といえるかしら」[1424-1425]

村人たちがネレイス夫人を憎悪するのは、彼女があからさまに「自分の体を辱め」たいという欲望に身を投じるためであって、けっして道徳的にかがわしいからではない。「一番いけないのはあの女が好んで、物笑いの種になっていたことだよ」[1539]と産婆のマレシャルはいう。彼女はネレイス夫人よりもはるかに身持ちの悪い女たちを知っていた。しかしその女たちは自分の醜行を注意ぶかく世間の目から隠す、あるいは隠しおおせないにしても、隠そうと努力する。その行為は人々を安心させる。なぜならそこでは、醜行はあくまで醜行として取りあつかわれているからである。その意味において不道徳な女性たちの醜行は反社会的な行為ではない。しかしある人間が醜行そのものを愛し、しかもそれを白昼堂々行うほどの過剰なエネルギーをもつとき、ことは人々の理解を越えたものとなる。ピエール＝ポール・デルポーは、ルネ・ジラルの理論を援用しながらネレイス夫人にたいする人々の憎しみを分析している。それによれば、ある共同体が解体の危機にひんしたとき、人々はその集団の構成員のなかからスケープゴートを選出する。そしてそれにすべての責任を負わせて共同体から排除することによって、その共同体は解体の危機を免れる。このとき生け贄に選ばれる者は、その集団内でアウトサイダー的な属性を有しているという¹⁴⁾。ここでは憎悪が称賛と表裏一体のものであることはことわるまでもなからう。ネレイス夫人がフヌイーユの村人たちに惨殺されたのは、彼女がその過剰ゆえにアウトサイダーであったためである。次にあげる彼女の言葉は、欲望への偏愛が高じて、いかに彼女が社会生活を送るうえでの規範を踏みこじっているかを表しているといえよう。

「わたしもむかしは人を喜ばせたいと思っていたわ。でも喜ばせてどうなるっていうの。人が喜んでいるのを見て喜んでもしかたがないでしょう、代金を前払いした品物を受け取って何になるの」[1424]

ネレイス夫人は「人を喜ばせる」という正常な社会生活のためにエネルギーを使うことを放棄し、それを欲望のために消費する方を選んだのである。だからその急激な変化にもかかわらず、エネルギーの側面から見ればウィーヌ氏の出現前とその後とでは彼女はなんら変化していないといえる。彼女の興味は快楽の追求であり、そこで問題にされるのはより大きな陶酔感を得ることだけなのである。

欲望への偏愛は死を求めさえする。ド・ヴァンドム老人の娘夫婦の心中がそうである。この老人の娘婿である密猟者のウージェーヌに特徴的なのは、臆病という属性であるが、このために彼は幼いころ小学校の教師たちにずいぶん打撃された。彼の臆病さは「横柄やあざけり」[1454]ととり違えられた。臆病さと横柄さという一見無関係に見えるこの言葉の結びつきは、ウージェーヌの臆病さが常識では把握できぬほど過剰なものであったことを示している。じじつ、ウージェーヌは臆病であるあまり、「一度も人からの挑戦を拒んだことがない」[1458]ほどなのである。過剰なものは同じ過剰を有している人間によってしか理解されない。とすれば、臆病さにおいて過剰であるこの密猟者が、家柄への過剰な誇りにとりつかれたド・ヴァンドムの家に入ったのは必然といえようし、彼が羊飼いの少年殺しの疑いをかけられることもそうであるといえまいか。密猟者の小屋にこもったウージェーヌとエレヌはそこで性的交渉をもとうとするが、夫は突然思いとどまり、妻に向かって言う。

「残念なことだ、おれたちが愛し合う別のやり方を知らないということは」と彼はあいかかわらず聞きとりにくい声で続けた。「別のやり方、本当のやり方——それがどういふものなのかおれは知らないが——例えて言うなら一度だけしか、ひとりの女と一度だけしかできないような。なぜって商売女とならおれは好きなだけやったからだ、嘘じゃない〔…〕」[1475-1476]

心中とはまさしく「ひとりの女と一度だけしかできないような」ことである。理性と労働によってささえられた世界が有益さを目指すのにたいして、性の展開する暴力的な世界は、直接的な満足を目指す¹⁵⁾。前者はエネルギーを節約するのにたいして、後者はエネルギーをひたすら消費する。そして破壊されるエネルギーが大きければ大きいほど、その快楽は大きい。この破壊の究極とは死である。ウージェーヌとエレヌの死は、究極的なエロティシズムの陶酔であるといえるであろう。ここで目指されているのはより大きな快楽をうるために、持てるものすべてを破壊しようとする衝動である。彼らは、神と真の意味

で対峙するための一過程として死を通過するのではなく、究極の破壊として、死そのものを愛するのである。ベルナノスの作品世界では自殺とはかならずしも背信行為ではないが、この二人の死は転回点を目指さないがゆえに究極的な罪といえよう。このように、彼らの心中も、先に述べたネレイス夫人の欲望への偏愛も、その生になんの転回点ももたらさないし、フヌイーユの教区にたいしてもしかりである。彼らの生命エネルギーはただ欲望のために無益に消費されるだけなのである。

2. 秘密の無効化

ド・ヴァンドム老人の家柄への誇りはフヌイーユの村では周知のことだったとはいえ、それは彼にとっては秘密であったといえよう。なぜならその誇りの激しさは、犯罪がそうさせるように彼を人々から孤立させたからである。村人たちが老人に反感を抱いたのは、彼らが老人の誇りにエネルギーの過剰の一形態を見いだしたためである。じじつ、それは彼の妻が死んだときにはその気丈さで村人たちを驚かせ、さらには娘夫婦を死に追いやってしまうほどに激しいものであった。しかし彼の孫のギョームはその誇りが老人の「脳髓から生まれた」[1461] 虚構にすぎないことをよく知っていた。老人自身もうすうすその虚偽に気がついてはいたが、彼がそれをはっきりと認識したのは、その家柄の高貴さを裏づける緑の男の存在を、孫のギョームによって否定されたときである¹⁶⁾。ド・ヴァンドム老人の秘密はこの少年の指摘によって秘密ではなくなってしまう。それではこのとき秘密は老人を浄化し、神と対峙させるという機能を果たしたであろうか。羊飼いの少年の葬儀に向かう彼は「わしは腐ってぶよぶよになった老木ようだ」[1482] と感じる。ベルナノスの作品世界において、無垢な世界は子供によって担われ、罪の世界は老人のものであることは既に指摘されている¹⁷⁾。したがって人を罪におとす秘密からの解放は、再生や若がりえりのイメージで語られなければならない。とすれば秘密から自由になったにもかかわらず、「老木」という言葉が使用されているということは、秘密がその機能を発揮しなかったということである。これは彼の秘密の無意味さからくるものではあるまいか。なぜなら彼の秘密の源である誇りとは、家柄への固執という依存的なもので、家柄を保証するものがなくなれば、たやすく解体するからである。つまり犯罪と違い、それには人を浄化する苦しみはともなわれないと思われる。デルヴォーは、先のギョームの指摘によって、老人は葬儀に参列する力を得たとしている¹⁸⁾。しかし自分の誇りが無意味なものであるという

認識は、むしろ彼から少年の葬儀に向かう途上にまちうけていた人々の好奇の眼差しに耐える力を奪ってしまったといえるのではないか。そしてそれは彼を迎えた人々の態度に現れているのではないか。もし彼が視線に耐え抜いて人々のあいだを堂々と歩いていったなら、彼は人々の笑いを誘ったであろう。それまでの彼の一連の行為は、すべて彼の秘密である誇りに裏打ちされており、それは人々の理解範囲を越えた過剰なものであった。過剰なものが人を魅了することは先に述べたが、それはまた人々に恐怖をもあたえる。そして恐怖が人々にとってもはや耐えがたいものになったとき笑いという現象がおこる。笑うことによって人は恐怖の対象を滑稽なものに変えてしまう。滑稽なものには人々を脅かす力はないからである¹⁹⁾。ド・ヴァンドム老人が目を伏せて人々の好奇の目から逃げだしたとき、彼は突然人々の目に理解可能な存在として映った。笑おうとして待ち構えていた人々の笑いは不発に終わる。これは老人の失墜であり、とりもなおさず彼の秘密の解体を示すものであるといえよう。このようにド・ヴァンドム老人の秘密はその無意味さを露呈することによって効力を喪失した。これにたいしてフヌイーユの村長アルセーヌの場合、秘密は、それを作用させる他者という触媒の欠如によって無効となる。

アルセーヌは異常な嗅覚に苦しんでいる。彼は妻をはじめ、さまざまな人々に自分の苦悩をうち明けるのであるが、だれひとりとして彼の苦しみを理解するものはいない。ただ司祭だけが村長の苦しみについて次のように言う。

「わたしはいつも考えてきました。あなたの……あなたのおっしやる不安のことを、異常で……滑稽なもの……と見なすのは、そういう不安をいっしょに味わうことができないほど軽薄な人たちか、あるいは……その不安を自分自身の内部に見いだす勇気のない臆病人たちだけだということ。なぜならそういう不安は我々すべての者の内にあるのですから」 [1518]

アルセーヌは不安の傀儡であるが、司祭の言うように、不安とはそれが「我々の内」から生まれるものである限り、人間の内部エネルギーなのである。とすれば不安や逸脱を知らない者は、生命エネルギーの過剰を知らないといえる。村長の不安の源は過去の性的過ちにある。つまりそれは彼にとっての秘密であるといえよう。しかし彼の生命エネルギーをすべて強迫観念形成のために空費させる原因を理解したところで、村長の不安がなくなるわけではない。フヌイーユの司祭はアルセーヌを彼の秘密から解放させるべく、過去のできごとを告白し、赦しを受け入れることをすすめる。赦しの効力にたいして懐疑的な村

長は司祭の申し出を拒絶する。一方、知的ではあるが生命の過剰を知らないフヌイーユの医師は、村長の手記のなかに彼の秘密を発見し、それによって全ての謎が解決されたと豪語する。現代の幕明けにおいてフロイトが性的本能についての注意を喚起したことは、画期的なことではあった²⁰⁾。しかしベルナノスが『悪魔の陽の下に』のムヌ＝スグレ神父に「彼らは内的な生活というものをどのようにしてしまっているか。本能の陰気な戦場にだ。道徳とは感覚の衛生だ」²¹⁾と語らせているように、科学的考察はややもすると精神世界の問題を全てエネルギーと衛生の問題に還元してしまう。その考察をおし進めることによって人々は、純潔と不純の弁別能力までも溷らしてしまったが、純潔への愛こそが神秘的なだとフヌイーユの司祭は言う。科学的考察によって純潔への郷愁が説明できないのと同様、秘密のもつ浄化作用もまた説明不可能なものである。村長の秘密は、それをくみ取ることができる司祭の目には隠され、それを理解できない医者目の目には晒されるのである。秘密から解放されるためには秘密が生じさせた苦悩を真に理解する他者が必要であることを考えるとき、村長にとっての秘密が本来の機能を果たさないことはいまでもなかろう。以上のように、転回点をもたらす機能を担う秘密の無効化は、ド・ヴァンドム老人の場合は秘密そのものの無意味性、村長アルセーヌの場合は秘密を理解する他者の欠如によって表される。

III ウィーヌ氏

1. 欲望への偏愛

この作品の中核をなす羊飼いの少年殺しをウィーヌ氏が犯したのは、単なる好奇心のためである。なににたいする好奇心か。それは人々の心への、とりわけ不安への好奇心であるといえよう。何かが生起するときにはすべてそれに先立って何らかの予感が走り、その予感ではできごとにといて誘惑的に作用するのはキルケゴールの不安な心理状態についての説明である。これは「一種の精神的無能力」で、この状態の下では全てのものが誘惑として働く²²⁾。フヌイーユの教区が一触即発の状態にあることを見ぬいた彼は、人々の魂には「傷ひとつつけることなく」[1559]、教区崩壊という予感にむかってマイナスのエネルギーを集中させ、村を崩壊させる。ここで彼がエネルギーを集中させた一点こそ、彼の犯した殺人であるといえよう。ウィーヌ氏にとって可能性とは、それが建設的なものであれ破壊的なものであれ、可能性である限りは実現

されなければならないのである。ベルナノスの描く司祭たちの多くが、人々を破壊的な可能性から引き離すよう努めるのは、愛という分析不可能なもののためである。愛によって人はさまざまな可能性のなかから選択をおこなう。つまりある可能性にたいしてはしかりといい、別の可能性にたいしては否という。この区別が抹消されるとき、すべての存在は単なるエネルギー態へと還元される。司祭の存在さえそうである。ベルナノスは司祭への憎しみについて次のような考察をおこなっている。

他のもろもろの権威が失墜したり消滅したりしたために、一見したところ社会生活ととても緊密に結びついているように見える司祭は、古代社会が、聖なる動物のように、神々と水入らずで親しく交わりあう存在として寺院の奥深くに閉じこめたあの老呪術師たちのだれよりも特殊で、分類不可能な存在になってしまったのである。
[1494]

司祭の役割が純粹に政治的なものなら、その存在は明らかに有益かつ社会的であり、世間から見て尊敬に値するものであるといえよう。しかしじつは、その存在は「神々と水入らずで親しく交わりあう」というものであって、有益な世界とは無縁の存在なのである。つまり信仰とは神を信じればその見返りに救われるという売買のようなものではなく、個人がその全存在を投入する賭けにほかならない。その意味で信仰は蕩尽という様相を呈する²³⁾。これは過剰の一形態であり、単に人々の憎しみをかきたてるだけである。少年の葬儀で司祭が行った演説にたいしてウィーヌ氏は「もっとも人間的な感情、たとえば哀れみさえもが毒になるような状況があるものです」[1492]と判断を下す。じじつ、神なき村への警告であった司祭の演説は、その意図とはうらはらに、ネレイス夫人惨殺の引き金となってしまう。知的ではあるがその洞察が卓上の域をでない医師と違ってウィーヌ氏は、なにがフヌイーユの村にとって致命的かを見抜くほどの洞察力をもち、かつそのような認識を手にするほどの過剰な生命エネルギーに恵まれている。しかし彼は、そのエネルギーを村の精神的救済のために役立てるのではなく、自身の好奇心充足のためにしか消費しないのである。なぜなら好奇心こそ彼の欲望を満たすことができる唯一のもので、欲望とはより大きな快楽を得るために果てしなくエネルギーを必要とするものだからである。ここでこの快楽への偏愛がいかなるものであるかをより明確にするために、ドストエフスキーの『スタヴローギンの告白』を参照したい。

スタヴローギンは告白のなかで、いかにしてひとりの少女を精神的に誘惑

し、死に追いやったかを物語るのだが、少女が彼のペンナイフを盗んだという身に覚えのない罪のために彼の目の前で母親から折檻される場面がある。この折檻の直前にスタヴローギンは件のペンナイフを見つけたにもかかわらず、その事実をふせて少女を折檻させてしまう。このとき彼は「自分の卑劣さの底深さを意識することによって、陶酔を感じる」[D.II. 551] のである。無力な少女を折檻から助ける喜びよりも、彼は自身を卑劣だと苦しいまでに意識する方を選ぶ。人間は卑劣さを憎むものだという常識はここではあてはまらない。自身の卑劣さに陶酔を覚え、自己自身を浪費するほどの人間の生命エネルギーとは並はずれたものであるといえよう。そしてこの過剰ゆえにスタヴローギンは、自意識過剰の陶酔のなかに快楽を求めるのである。ネレイス夫人が正常な社会生活を捨て、自分の身を卑しめてまでも欲望の充足を望み、ド・ヴァンドム老人の娘夫婦が互いへの愛のため自死の一瞬にすべてのエネルギーを傾けるように、ウィーヌ氏もスタヴローギンも正常な感情にふりむけるべきエネルギーを瞬間の快楽のために消費しているといえよう。

さて、自らの快楽を最重要視するウィーヌ氏の心理状態について述べてきたが、彼の快楽への偏愛の萌芽を形成したと思われる幼年時代のエピソードがある。小学校の生徒だったウィーヌ氏は歴史の教師によってホモセクシャルな誘惑を受けるのである。

そして彼、ウィーヌは生まれて初めて——そしておそらくそれを最後に——わかってもらおう、説明をしようを試みたのだった。一方、彼の魂の忘れられていた部分で突然見いだされた言葉は、際限なく溢れる泉からほとばしるように思われた。いくつかの言葉を口にするや、別の言葉がまた喉の奥でひしめきあい、抑制することができず、調子はずれに彼はしゃくりあげた。ああ！ なんという甘美な涙！ 涙の熱い恥ずかしさはなんと甘美で解放感に満ちていたことか！ […] もう彼には光の輪のようなものしか見えなかった。それは初めはぼんやりとしていたが、青白い霧の中から浮かび上がるように、そのなかからしだいに歴史の教師の顔が見えてきた。それと同時に彼は、赤い髭に刺されるのを感じた。そして彼の上に、彼のまなざしの上に、まっげとすれすれに、死者のまなざしのように虚ろで動かない、未知の別のまなざしが… … [1473]

スティニーと同じ目をし、おそらくは彼のように孤独で反逆的だったであろうかつてのウィーヌ氏は、歴史の教師のもとで生まれてはじめて解放の涙を知るのである²⁴⁾。そしてこの歓喜にひきつづいて性的誘惑が行われる。このため純粋な解放の歓びは官能的な陶酔にすり替えられたといえるのではあるまいか。

「私は欲した、自分の飢えを満たすかわりにますます欲望で膨れ上がった」[1552] という彼は、子供時代に覚えた陶酔を、その生命エネルギーの過剰ゆえに反復しているのではないか。興味深いことにスタヴローギンと家庭教師がわりのステパン氏とのあいだにも同じような関係が見うけられる。ステパン氏は、傷つけられた自分の感情を涙ながらに訴えたり、なにが家庭内の秘密を打明けたりするためだけに、深夜まだ幼いスタヴローギンを揺り起こし、彼らはともに涙に暮れたのである²⁵⁾。確かにウィーヌ氏の受けた誘惑がホモセクシャルなものであるのにたいして、ステパン氏はスタヴローギンを性的に誘惑したわけではない。しかし両者の重要な共通点とは、彼らの教師が2人の生徒の心の中に憂愁を目覚めさせたことである。ドストエフスキーは選ばれた魂がこの憂愁を知るや、彼はけってこれを安価な満足に見かえようとはしなくなる、それどころか完全な満足よりもこの憂愁を好む者さえ存在するという。とすれば2人の教師の誘惑は、過剰な生命エネルギーをもって生まれた彼らの生徒に、最も悪質な作用を及ぼしたといっても過言ではあるまい。

2. 秘密の無効化

ウィーヌ氏はその死にさいしてスティニーに、自分がいかに人々の魂を好奇心によって貪ってきたかを語って聞かせる。しかしスティニーの「それならあなたは無駄に生きていたわけではなかったのですね」[1559] という問いにたいして、彼は「自分は本当に今いったことをしたのだろうか」[1559] としか答えることができない。彼は自分が行為したという事実も、行為しなかったという事実も信じることができないのである。なぜこのようなことがおこったのか。ウィーヌ氏が快樂のために自分の好奇心を満たすことしかなかったことは先に述べたが、最初、彼のために奉仕していた好奇心は、徐々に彼を蝕み、彼は知恵の杯のなかに落ちこんだといえよう。彼の主人はもはや彼自身ではなく、彼の好奇心なのである。彼が自分自身の主人でない以上、全ての行為の責任は彼にはない。したがって彼は少しの良心の呵責も感じることができない。ウィーヌ氏が殺人をはじめとする一連の行為を行為として認識できないのはそのためである。マニーは『ウィーヌ氏』を評して、彼はなにごともしないといい、せめて彼が迷惑をかけることさえできれば、プラス的行為を創りだすことができたであろうとしている²⁶⁾。この、なにごともしないという言葉は、いっさいの行為が彼にとって無関係であることを意味している。先に秘密とは「有効な浄化の苦しみ」というドニサン神父の言葉をあげたが、それはまさし

く痛みに他ならない。外傷を受けたときに感じる痛みは、生命を保持するために身体から出される危険信号として働く。これと同様、秘密のもたらす苦しみとは精神を危機から救うための信号であるといえまいか。ウィーヌ氏の悲劇とは、彼がもはやこの苦しみを感じることができない麻痺状態にあるということである。この麻痺状態は、浄化の作用を停滞させる。そのために秘密は秘密でなくなってしまうのである。じじつウィーヌ氏は自分には秘密が必要なのだという。

「わたしには秘密が必要なのだ」とウィーヌ氏はつけた。「たったひとつでいいからどうしても秘密が必要なのだ。想像しうる限りどんなにくだらなくてもいいし、地獄の悪魔を全部合わせたよりもずっといやらしく、恐ろしくてもいい。そう、たとえそれが鉛の粒ほどの大きさしなくても、わたしはそれを中心にして成長し、重さと安定を取り戻すことができると思う……ひとつの秘密というのは、君、わたしの言うことをよく理解したまえ、秘密というのは告白に値する隠しごと、という意味だ——告白か、交換か、いずれにせよわたしが他人の背中に移すことができるようなものだ」
[1555]

秘密というものは「告白に値する」なものかであるとき、ド・ヴァンドム老人の家柄への誇りが、秘密としての機能を発揮しなかったのは当然であるといえよう。なぜならそれは確かに娘夫婦を死に追いやるといふ苦しみを彼に与えはしたが、最初からだれの目にも明らかであり、しかも彼自らが行為した結果ではないからである。つまり、誇りそのものはけっして彼の苦しみとはならなかった。これにたいしてウィーヌ氏は殺人を犯した。これは当然、秘密として機能できる類いのものである。しかし彼は犯した罪について告白したいという思いさえ抱かないほど、なんの痛みも感じていない。そればかりか、殺人にかんするウィーヌ氏の内的独白さえも見られない。殺人という事実は、作品中ではけっして明らかにされず、個々のほのめかしによって裏づけられているだけである²⁷⁾。この内的独白の欠如こそ、彼の行為の無意味さを裏づけるものであり、秘密の無効性を示しているといえよう。このように、ウィーヌ氏にとっての秘密は秘密としての機能を喪失した。また彼は、黙示録の「かく熱きにもあらず、冷ややかにもあらず、ただ微温きがゆえに、われ汝をわが口より吐きださん」と対応しているように思われる「冷たくも熱くもない水」[1556]というたとえを使って、自分の空虚な内面を語っている。スティニーにたいして「誰が私といっしょにこの水を飲みたがるだろうか」[1556]という彼は、子供

時代の自分に似たスティニーさえも、彼の陥っている空虚さをけっして理解できないという確信を抱いている。ウィーヌ氏にとっての秘密の無効化は、秘密そのものの解体だけではなく、彼の陥っている絶対的な孤独という、他者の欠如によっても表されているということができよう。

同じ麻痺状態はスタヴローギンにも見られる。バークハードは、ウィーヌ氏とスタヴローギンの、人々を魅了し、自らは手を下すことなく彼らを破滅に追いやるという共通点について指摘したが、同時に次のような相違点もあげている。すなわちウィーヌ氏が結核で、つまり自らの意に反して命をおとすのにたいし、スタヴローギンは自殺することによって神への反抗を貫きとおしたのだと²⁸⁾。しかしウィーヌ氏の殺人が行為とは呼べないように、スタヴローギンの自殺もまた反抗とは呼べないように思われる。もしもスタヴローギンの自殺が神への反抗であるなら、キリーロフの自殺がそうであったように、それは神を深く意識した行為といえよう。とすればそこには大いなる信念が息づいていることになる。しかしスタヴローギンの悲劇が、「たとえ信仰をもっている、自分が信仰をもっていることを信じようとしな。信仰をもっていないとしたら、信仰をもっていないことを信じようとしな」[D.II. 434-435]という永遠の懐疑にあるとすれば、彼にとって自殺とはなんの情熱も見いだせなかったそれまでの一連の行為の延長線上にあるものでしかない。スタヴローギンの秘密とは無垢な少女を死に追いやったことであつた。チホン神父は彼の罪の忌まわしさにおののきながらも、法的にはけっして非のないその事実を罪として認識した彼の宗教的感受性に感銘を受ける。罪から解放されるためにはそれを世間に公表することが必要であるとスタヴローギンは考えていた。しかし彼がその公表を恐れるあまり「救いの道を求めて、新たな犯罪に」[D.II. 588]身を委ねつづけるうちに、秘密の無化がおこつたといえるのではないか。「問題は、生きていくのが気が狂いそうなほど退屈なことであつた」[D.II. 567]というスタヴローギンの言葉は、ウィーヌ氏の、「人間が一番最後にこうむつた失寵とは、悪そのものでさえも人間に倦怠感を催させることです」[1469]という言葉と等価値であるといつてよかろう。とすれば、ベルナノスもドストエフスキーも、過剰な生命エネルギーに恵まれたにもかかわらず、いずれもその力を自分自身のためにしか使わなかつたために、倦怠に蝕まれた魂の末路を描いたといえるであろう。

結 語

キルケゴールの師ポール・メラーは永遠のエダヤ人アハスヴェルスについての断章を残しているが、そこには「人生の寒暖計の零度」という言葉が見つけられる²⁹⁾。これは善と悪の絶対的差異が抹消された状態なのであるが、ベルナノスにとっての悪とはまさしくこの状態を指すものである。ベルナノスにはマニケイスムの要素があると見なす批評家もあった。これにたいしてマニーは、「神と我々の間には何者かがいるのだ」という言葉を使用するような作家に、そのような要素があるとは考えられないと述べて反論した。また彼女は、ベルナノスが処女作『悪魔の陽の下に』で描いた悪魔の具体的仲介という観念が、『ウィーヌ氏』ではまったく見いだせないことから、作者はよりいっそうマニケイスムの領域から遠ざかったと指摘する³⁰⁾。ベルナノスが最後の小説『ウィーヌ氏』で、悪魔というイマージュに頼ることなく、どこにでも存在する教区の崩壊を通じて悪を表現したという事実は、とりもなおさず彼の悪への考察の円熟を示すものであるといえるだろう。

註

- 1) 『ウィーヌ氏』のテキストとしては、プレイヤッド版『小説集』(Georges BERNANOS, *Ceuvres romanesques*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1988) を使用し、同版からの引用にあたっては、そのページ数のみを本文中 [] 内に示す。訳出にあたっては、渡辺義愛による邦訳(『ベルナノス著作集』第3巻, 春秋社, 1979年)を参照した。また、本稿でしばしば引用・言及するドストエフスキー『悪霊』については、江川卓による邦訳(上下巻, 新潮文庫, 昭和46年)を使用した。なおベルナノスとドストエフスキーの引用を区別するために [] 内ページ数のまえに『悪霊』の場合はDを、上巻の場合にはI、下巻の場合にはIIをつけ加えた。
- 2) Cité par Albert BÉGUIN, *Bernanos*, Paris: Éd. Seuil, coll. «Écrivains de toujours», 1954, p. 167.
- 3) Voir Claude-Edmonde MAGNY, «Monsieur Ouine, le dernier roman de Bernanos», *Poésie*, n° 46, juin-juillet 1946, pp. 105-115.)
- 4) Cité par Albert BÉGUIN, *Bernanos*, op. cit., p. 50.
- 5) ヨハネ黙示録第3章15節から16節。なお、この一節は『悪霊』のなかで何度か繰り返され、その主題ともいうべきものである。
- 6) キルケゴール『死にいたる病』(松浪信三郎訳, 河出書房新社「世界の大思想」第

- 17 卷, 1974 年, 460 頁。
- 7) Voir Frédéric LEFÈVRE, «Interview de 1926 par Frédéric Lefèvre», in BERNANOS, *Essais et Écrits de Combat*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1971, p. 1038.
 - 8) Voir Maurice BLANCHOT, *Faux Pas*, Paris: Gallimard, 1943, pp. 203–208.
 - 9) Voir BERNANOS, *Journal d'un Curé de Campagne*, in *Œuvres romanesques*, op. cit., p. 1226.
 - 10) Voir BERNANOS, *Sous le Soleil de Satan*, in *Œuvres romanesques*, op. cit., pp. 230–232.
 - 11) Voir BÉGUIN, *Bernanos*, op. cit., p. 80. また、ベガンはその語りの優しさのため、『新ムーシェット物語』には、全編にわたってムーシェットを見守る司祭のような視線が感じられることを指摘し、彼女は自殺するにもかかわらず、救われるという印象を受けると述べている。
 - 12) BERNANOS, *Sous le Soleil de Satan*, op. cit., p. 308. 原文イタリック。
 - 13) Voir BÉGUIN, *Bernanos*, op. cit., p. 80.
 - 14) Voir Pierre-Paul DELVAUX, «Esquisse pour une lecture de *Monsieur Ouine*», in *Études bernanosiennes 19*, Paris: Lettres Modernes Minard, 1988, pp. 209–228. また、バルベール・ドゥールヴィイがベルナノスに先んじて『魔法にかけられた女』(Barbey d'AUREVILLY, «L'Ensorcelée», in *Œuvres romanesques complètes*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», tome I, 1991) のなかでネレイス夫人と同様民衆の憎悪のまえに無残な死を遂げる貴族の女性クロットを描いていることはヘルマン・ホーファーが指摘している (voir Hermann HOFER, «Bernanos Aurevillien, Barbey Bernanosien», in *Barbey d'Aurevilly 6*, Paris: Lettres Modernes Minard, 1971, pp. 61–117)。さらに、ドストエフスキーの『悪霊』においてもスタヴローギンの妻が殺された現場で、彼を愛していたリザヴェータがそこに集まっていた人々の憎しみをかって惨殺される。
 - 15) 『エロティシズム』のなかの『死と結びついた禁止』でバタイユは暴力が理性に打ち勝つこの領域に関する論述を展開させる。Voir Georges BATAILLE, *L'Érotisme*, Alençon: Éd. de Minuit, 1979, pp. 62–78.
 - 16) Voir BERNANOS, *Sous le Soleil de Satan*, op. cit., p. 214.
 - 17) シェーデッガーはドニサン、シュバンス、アンブリクールの司祭そしてフヌイユの司祭は皆、子供の魂をもっていると指摘する。Voir Jean SCHEDEGGER, *Georges Bernanos Romancier*, Neuchâtel et Paris: Éd. Victor Attinger, 1956, pp. 33–34.
 - 18) Voir DELVAUX, *art. cité*, p. 219
 - 19) ドストエフスキーの『悪霊』のなかで、チホン神父は、スタヴローギンが彼の罪を告白することによって世間に巻き起こすであろう恐怖には耐え得るだろうが、彼の宗教的感性の現れであるこの告白の力を奪い、滑稽なものにしてしまう笑いに果たして耐えることができるかどうかを懸念する。
 - 20) ベルナノスが批判するのは精神分析の亜流で、フロイトが性的本能の存在を指摘し

- たことは意義深いことだと述べている。Voir LEFÈVRE, «Interview de 1926 par Frédéric Lefèvre», art. cité., p. 1046.
- 21) Voir BERNANOS, *Sous le Soleil de Satan*, op. cit., p. 221.
- 22) 大谷愛人『キルケゴール青年時代の研究』, 草勁社 1966年, 704-705頁。キルケゴールはこの「精神的無能力」について次のように述べている。「なにかが生起するときにはすべてそれに先立ってなんらかの予感が走るものである。しかもその予感〔そのできごとにかんし〕制止を命ずるように働くことができると同様に, 〔そのできごとへと〕誘惑的に働くこともできる。というのは, その予感, その人間に, 彼の運命は予定されているという考えを起こさせるからである。そしてその人間は, その予感の帰結を通じて自分を見るようになり, 自分は〔帰結が示した〕あるところへ連れられてきてしまっているとみるのである」なお, 表記上若干の変更を加えた。
- 23) バタイユは『呪われた部分』の中で〈蕩尽〉という概念から宗教的なものについての考察をおこなっている。Voir Georges BATAILLE, *La Part maudite in Œuvres complètes*, Paris: Gallimard, tome VII, 1976, pp. 51-65.
- 24) なお『田舎司祭の日記』のなかで, 涙を流すと悲しみが消えて心がバターのように解けていくといった教区の少女セラフィータにたいして司祭は「その泣き方こそが卑怯ではない泣き方だ」と答える。Voir BERNANOS, *Journal d'un Curé de Campagne*, op. cit., p. 1207.
- 25) スタヴローギンのこの幼年時代のエピソードの箇所を以下にあげる。「ステパン氏がまだ10か11歳のこの親友〔スタヴローギン〕を, 深夜, それもただただ, 傷つけられた自分の感情を涙ながらに少年に訴えたり, なにか家庭内の秘密を打ち明けたりするためだけに揺り起こすようなことも再三で, しかも彼は, それがまったく許しがたい行為だということには, 気がつきもしなかった。2人は, おたがいひしと抱き合って, 涙にくれたものである」[D. I. 59]。
- 26) Voir MAGNY, art. cité, p. 114.
- 27) マニーはこれをアメリカの小説家の古典的な手法であるとしている。そして『ウィーヌ氏』においてすべての謎が謎のまま放置されるのは, この作品が, なにひとつ明確にならない世界を取り扱ったものだからであるとしている。Voir MAGNY, art. cité, pp. 106-109.
- 28) Voir Willy BURKHARD, *La Genèse de l'idée du mal dans l'œuvre romanesque de Georges Bernanos*, Zurich: Juris Druck Verlag, 1967, p. 285.
- 29) 善と悪との質的差異にかんしてキルケゴールは次のような体験をもっている。彼の最初の文学研究は「盗賊の首領」についてであり, そこに彼は「既存のものへ反抗する誤解された悲劇的例外者」を認めて共感を覚える。しかし彼が青年らしいローマン的な感激から「盗賊の首領」たちは「力を誤用しているだけのだから, そのような人間なら充分回心の可能性はある」と述べたとき, 彼の父親は「神の耐えざる助力によってしか打ち勝つことのできないような犯罪があるものだ」と答える。ここには善と悪の質的差異のなんたるかが表されていると思われる(大谷前掲書, 659-702頁参照)。キルケゴールが犯罪者の心理を研究することから出発したとい

うのは注目すべきことであるといえよう。

- 30) Voir MAGNY, *art. cité*, p. 111. マニーによればアンドレ・テリーヴはランブルの司祭の物語がジャンセニスムのおちいる風変わりなマニケイスムの例であるとしている。